コラム2

グローバルなデジタル社会における「フラット化」と「分断」

――2025年日中若者調査のSNS利用データから



中央大学文学部社会情報学専攻教授

松田 美佐

今日、SNSは世界中どこででも、若者にとってある種の生活基盤となっているが、その利用実態はそれぞれの国や地域の人間関係や文化、社会を反映している。私が参加するグローバル若者文化研究会では、ほぼ5年おきの質問紙調査をベースとして、過去30年以上にわたる日本国内の若者文化の経年変化について、大都市と地方都市の差異に着目しながら、「遠隔＝社会、対人性、個人性」という3領域の視点から計量的なモノグラフとして描き出してきた(辻・大倉・浅野・松田、2022)。

この研究の一環として、2025年には日本と中国の若者を対象としたオンラインアンケート調査[1]を行い、デジタル環境の成熟が、それぞれの国で若者文化にどのような「地域差」をもたらしているのかを検討した。その中から、本稿ではSNS利用に関する項目に焦点をあてて紹介したい。見えてくるのは、日本における「地域差の消失(フラット化)」と、中国における「都市と農村の分断」という非対称な構造であり、それ以上に顕著な日本と中国の若者の「積極性」の差である。

1. 日本の若者:インフラの成熟による「フラットな日常」

図表1はこの1ヶ月にSNSで行ったことを複数回答可で尋ねた結果である[2]。日本のデータを見ると、SNSの利用において地域間の有意な差はほとんど確認

図表1●この1ヶ月の間にSNSでしたこと(複数回答) (%)

	日本 (n=520)	三大都市圏 (n=219)	その他 (n=301)	χ^2	中国 (n=520)	都市戸籍 (n=326)	農村戸籍 (n=190)	χ^2
Q9_1【文字だけで投稿する】	31.7	31.5	31.9	n.s.	41.2	43.3	37.9	n.s.
Q9_2【「ストーリーズ」を投稿する】	44.0	45.2	43.2	n.s.	31.0	30.1	33.2	n.s.
Q9_3【ハッシュタグを付けて投稿する】	18.1	16.9	18.9	n.s.	29.0	29.1	28.9	n.s.
Q9_4【「いいね!」を押す】	71.9	71.2	72.4	n.s.	90.6	89.6	92.6	n.s.
Q9_5【コメントを書く】	21.7	20.1	22.9	n.s.	80.0	81.9	76.8	n.s.
Q9_6【メッセージを送る】	38.1	38.8	37.5	n.s.	61.7	62.6	60.0	n.s.
Q9_7【共有する(シェアする、RPする)】	26.0	26.9	25.2	n.s.	48.1	47.9	48.4	n.s.
Q9_8【プロフィールで自分の顔写真を公開している】	5.0	5.0	5.0	n.s.	20.8	21.2	20.5	n.s.
Q9_9【ニュースや情報を検索する】	27.1	27.9	26.6	n.s.	41.0	45.1	33.7	*
Q9_10【(タイムラインで)ニュースや情報をチェックする】	27.3	26.5	27.9	n.s.	44.4	47.9	38.4	*
Q9_11【暇つぶしにタイムラインを眺める】	50.0	52.5	48.2	n.s.	26.9	27.0	26.8	n.s.
Q9_12【友人などの近況を把握する】	33.7	34.2	33.2	n.s.	61.2	62.6	58.4	n.s.
Q9_13【外国人と交流する】	2.3	2.7	2.0	n.s.	7.1	8.3	5.3	n.s.
Q9_14【外国のニュースや文化に関する情報を見る】	5.2	4.6	5.6	n.s.	21.2	22.7	18.9	n.s.
Q9_15【日本語(中国語)以外で投稿する】	2.1	2.3	2.0	n.s.	5.0	5.2	4.2	n.s.
Q9_16【SNSは利用していない】	6.2	3.7	8.0	*	0.0	0.0	0.0	n.s.

注: 中国(n=520)は保有戸籍の無回答者4名を含む。

されない。これは、日本国内においてスマートフォンや高速通信網といったインフラが全国的に普及し、都市部であっても地方であっても、等しく同じデジタル空間を享受していることを示唆している。本書の資料2-7でも、XやInstagramが若年層を中心に高い利用率を示しており、日本でデジタルメディア利用が若者の日常に広く定着していることがうかがえる。

かつての若者論では、情報の伝播速度や文化受容のラグによる「都市と地方」の格差が議論されてきた。しかし、本調査の**図表2**に示されるSNSでの経験[3]（たとえば、SNSで誰かをブロックした経験やアカウントに鍵をかける傾向など）

図表2●SNS利用で経験したこと（複数回答）　（%）

	日本 (n=520)	三大都市圏 (n=219)	その他 (n=301)	χ^2	中国 (n=520)	都市戸籍 (n=326)	農村戸籍 (n=190)	χ^2
Q10_1【アカウントに鍵をかける】	70.7	72.0	69.7	n.s.	36.7	35.9	37.9	n.s.
Q10_2【「映え」を意識した写真を投稿したことがある】	36.5	32.7	39.4	n.s.	25.2	27.3	21.6	n.s.
Q10_3【「盛り」を意識した写真を投稿したことがある】	20.3	22.7	18.4	n.s.	31.9	32.5	31.6	n.s.
Q10_4【SNSにはできるだけ自分から投稿しないようにしている】	29.7	28.4	30.7	n.s.	26.7	25.5	29.5	n.s.
Q10_5【SNSには自分の顔写真を載せないようにしている】	44.9	40.8	48.0	n.s.	38.1	39.0	37.4	n.s.
Q10_6【フォロワー数を増やしたいと思ったことがある】	21.5	19.0	23.5	n.s.	41.9	41.7	41.6	n.s.
Q10_7【フォロー数とフォロワー数のバランスを気にしたことがある】	29.3	28.4	30.0	n.s.	30.2	30.4	30.0	n.s.
Q10_8【自分が何かするとき、SNSでの反応を気にしたことがある】	26.4	22.7	29.2	n.s.	26.7	28.8	23.7	n.s.
Q10_9【直接会ったことがない人と、SNSでやり取りをしたことがある】	37.3	30.3	42.6	**	37.7	38.3	36.3	n.s.
Q10_10【SNSで人から嫌な思いをさせられたことがある】	16.8	15.2	18.1	n.s.	22.7	24.8	19.5	n.s.
Q10_11【SNSで誰かを、ブロックやミュートしたことがある】	44.3	39.8	47.7	*	22.9	23.0	23.2	n.s.
Q10_12【SNS上のショート動画を見始めると次から次に見続けてしまう】	42.6	42.2	43.0	n.s.	51.0	51.8	49.5	n.s.
Q10_13【SNS上のショート動画で紹介されている物を買ったり、場所に行ったりしたことがある】	25.2	23.7	26.4	n.s.	42.7	41.4	44.7	n.s.
Q10_14【SNS上の「おすすめ」が不快なときに、表示内容が変わるように工夫したことがある】	30.5	30.8	30.3	n.s.	36.7	36.5	37.9	n.s.
Q10_15【SNSで騒ぎになっている情報について調べたことがある】	32.0	32.7	31.4	n.s.	41.2	40.8	41.1	n.s.
Q10_16【闇バイトや非合法のオンラインカジノなどの情報をSNSで目にしたことがある】	6.4	5.7	6.9	n.s.	5.4	5.2	5.8	n.s.
Q10_17【この中にあてはまるものはない】	10.9	11.4	10.5	n.s.	1.2	1.5	0.5	n.s.

注：中国（n=520）は保有戸籍の無回答者4名を含む。

においても、日本の若者は居住地域に関わらずほぼ同様の行動様式をとっている。

実はこのような傾向は、以前から見られたものであり、2020年調査を報告した辻・大倉・浅野・松田(2022)でも、かつて顕著に見られた都市と地方の若者文化の差異が次第に縮小していることを指摘している。日本においてはメディア環境の成熟に伴い、少なくとも主観的な意識や日常行動のレベルでは、すでに「フラット化」が完遂されつつあるといえるだろう。

2. 中国の若者：ニュースへのアクセスに見る「都市と農村の分断」

対照的ととらえたいのが中国の結果である。中国ではデジタル化が急速に進展している一方で、SNSの利用実態には都市戸籍と農村戸籍の間で「分断」が生じている、あるいは残っているように見えるのだ。

確かに、この1ヶ月にSNSで行ったことは、日本の若者と同じように、ほとんどの項目で差が見られない(**図表1**)。しかし、注目すべきはニュースや情報への向き合い方である。「ニュースや情報を検索する(都市戸籍45.1％＞農村戸籍33.7％)」や「(タイムラインで)ニュースや情報をチェックする(都市戸籍47.9％＞農村戸籍38.4％)」において、都市戸籍の若者が農村戸籍を大きく上回っている。

この差は、単にアプリを立ち上げている時間の長さではなく、その「質」において差があることを示しているのであろう。というのも、1日平均のスマホ利用時間は、農村戸籍(461.4分)、都市戸籍(424.7分)と農村戸籍の若者の方が長いのだ(p<.001)。

都市戸籍の若者がSNSを社会情勢の把握や情報収集のツールとしても能動的に活用する「アクティブさ」を備えているのに対し、農村部の若者にとってのSNS利用は、より受動的、あるいは趣味など私的な領域が中心である可能性が推察される。さらに、**図表2**の利用経験において地域差が見られないことを踏まえると、中国の農村部においてもSNSというツール自体は浸透しているものの、それを「どのように使い、どのような価値を引き出すか」というリテラシーや意識の面で、いまだ社会構造的な格差があると考えられる。

3. 日中比較から見える「積極性」のコントラスト

さて、むしろより大きな違いが浮かび上がるのは、日本と中国の若者の間である。

全体として、中国の若者は日本の若者に比べてSNSを介したコミュニケーションに極めて積極的である。たとえば、以下の項目で中国の若者は日本を20ポイント以上、上回っている。

・コメントを書く
・メッセージを送る
・共有する(シェアする、RPする)
・友人などの近況を把握する
・フォロワー数を増やしたいと思ったことがある

これに対し、日本の若者が中国の若者より20ポイント以上多いのは、身を守るための、あるいは内向的ともいえる行動である。

・暇つぶしにタイムラインを眺める
・アカウントに鍵をかける
・SNSで誰かを、ブロックやミュートしたことがある

2年前の『モバイル社会白書』のコラム(松田、2024)では、ネットで情報発信しない人の多さを(日本の)データをもとに取り上げたが、上記の日本の若者のSNS利用にも、同様の消極性が見てとれるのだ。

さらに、このような「日本の若者の内向性」および「中国の若者のアクティブさ」という構図は、今回の調査ではSNS利用以外のデータにも見出すことができている。興味を持たれた方は辻・松田(2026)をご一読いただきたい。

4. デジタル社会の「多様な風景」

こういったデータから見えてくるのは、グローバルな情報化が必ずしも若者の日常生活や若者文化を、そして、世界を1つの「フラットな場」へと収束させるわけではないということであろう。日本においては、メディアが地域格差を溶解させる「フラット化の装置」として機能した。一方で中国においては、デジタル化が進展しながらも、戸籍制度に象徴される強固な社会構造などとも結びつくことで、むしろ都市と農村の意識と行動の「分断」を可視化させる結果と

なっている。

そして、それ以上に目を引くのは「日本の若者の内向性」および「中国の若者のアクティブさ」である。

若者たちが手にするスマートフォンという「窓」は同じ形をしていても、そこから見えている風景、そしてその風景に対する若者たちの働きかけ方は、それぞれの国や地域が抱える社会的文脈によって全く異なる色を帯びている。

あたり前のことであるが、そのあたり前が明瞭に現れたデータを前に、若者とメディアのこれからを考えている。

注

1 日本と中国の20歳の男女、それぞれ520名を対象に2025年12月に実施。地域間比較として、日本については3大都市圏とその他の居住者を、中国については都市戸籍と農村戸籍の保有者を、それぞれ比較する。

2 地域間比較においては、統計的検定（χ二乗検定，t検定）を行っている。表中の、＊＊＊＝0.1%水準で有意（α<.001）、＊＊＝1%水準で有意（α<.010）、＊＝5%水準で有意（α<.050）、※＝10%水準で有意（α<.100）、である。

3 SNSを利用していて経験したことを複数回答可で尋ねた結果である。

参考文献

松田美佐（2024）．「『推し』の存在はスマホ活用につながるのか？」『モバイル利用トレンド2024-2025 モバイル社会白書』．NTT出版．

辻泉・松田美佐（2026）．「2025年日中オンライン調査からみる若者文化の比較社会学的研究――『遠隔＝社会，対人性，個人性』三領域およびメディア文化とグローバル意識・行動に焦点をあてて」『中央大学社会科学研究所年報』30．

辻泉，大倉韻，浅野智彦，松田美佐（2022）．「若者文化は30年間でどう変わったか―『遠隔＝社会，対人性，個人性』三領域の視点からの『計量的モノグラフ』（その2）」『紀要社会学・社会情報学』．中央大学文学部，32：1-52．

※本稿は、公益財団法人高橋産業経済研究財団による令和7年度研究助成を受けた研究成果の一部であり、辻・松田（2026）の一部を改稿したものである。